

令和2年度 兵庫県立和田山特別支援学校 学校評価〔自己評価〕

重点課題		
1 児童生徒の主体的、対話的で深い学びを促す指導の工夫	2 連続性のある多様な学びの場における教育の充実	3 チームで取り組む一貫した相談・支援体制の推進
4 卒業後に自分らしく生きるためのキャリア教育の充実	5 学校と寄宿舎の連携による指導の充実	6 教職員の学びの継続による専門性の確保と継承
評価	4：目標は十分達成されている	3：目標は概ね達成されている
	2：目標はあまり達成されていない	1：目標はまったく達成されていない
判定	A：良好（評価平均3.5以上）	B：概ね良好だが一層の取組が必要（評価平均3.0以上）
	C：取組に相当の工夫が必要（評価平均2.0以上）	D：取組の見直しが必要（評価平均2.0未満）

担当	重点課題についての目標	重点課題	目標実現のための取組	総括(年度末評価)	評価	判定	課題と改善点（来年度に向けて）
					平均		
小学部	個の特性に応じつつ、小グループでの共同的な学習を促す	1	児童グループの発達段階に合わせた学習内容や指導方法の改善に努める。	・発達段階に応じて課題や役割を与えることで、友達に道具を配る、友達と手をつないで歩く、友達を待つなど、友達を意識する姿が多く見られた。児童の小集団が形成できつつあると感じる。	3.4	B	【課題】 ・次年度、児童数が増えることもあり、児童の発達段階や障害特性に応じたグループを編成することが課題。 【改善点】 ・児童の発達段階や障害特性をより理解するための研修機会を持つ。 ・児童同士のかかわりを、授業や生活の中で意図的に仕組む。
	児童の主体的な参加を促す授業づくりを研究する	6	日々の振り返りやテーマ研究を通して、教員集団での授業研究を進める。	・教員間の話し合いを重ねたことで、多様な視点から児童の指導・支援について考えることができた。さらに固定的な担任ではなく、教員集団として指導・支援にあたることできた。 ・教員が意図的に児童との距離をとったことで、児童の自発的な姿をとらえて評価することができた。	3.4	B	【課題】 ・授業研究での成果を、他の授業にも生かすことが課題。 【改善点】 ・放課後の教員打合せを継続し、翌日の集団授業のねらいを共通理解する。 ・児童にとってより分かりやすい環境づくりを行い、児童が自発的に動ける場面では教員が見守る体制をつくる。
中学部	授業研究を通して、教科での主体的、対話的で深い学びを踏まえた授業づくりを行う	1	・生徒が自分で気づけるように促すような声掛けを行ったり、生徒から質問等があるまで見守ったりする。 ・グループやペア等、生徒同士が協働する活動を授業で設定する。	・体験的な活動を多く取り入れることで、生徒の幅広い実態にも対応でき、どの生徒も主体的に参加することができた。 ・各時間のねらいに応じて生徒の学習グループを編成することで、生徒同士の話し合いを実態に応じて深めることができた。 ・授業づくりの最初には、卒業後を意識して、つけたい力を教師全員で話し合い、共通理解した上で単元計画を検討することができた。	3.3	B	【課題】 ・生徒一人一人の学びを更に深めていくにはどのような指導・支援が効果的か、授業で身につけた力をどのように般化させていくのかが課題である。 【改善点】 ・集団での学びと個別支援での学びのバランスを見極め、指導体制や指導・支援方法の検討を随時行う。 ・般化については家庭との連携に加え、カリキュラム・マネジメントの視点で各教科において教科等横断的な単元設定を行う。
	生徒の自己肯定感を高める指導・支援を行う	4	・生徒同士がお互いの個性を認め合えるような教師の声掛けや教室の雰囲気づくりを行う。 ・生徒への評価については、結果だけではなく、そこに至るまでの生徒自身の試行錯誤等の過程を認めるようにする。	・教師が生徒に対し少しでもできていることを認めるような肯定的な声掛けをしたり、励ましたりすることで、生徒が積極的に活動に参加し、発表をしようとするが増えた。また、生徒同士で頑張りを認めたり、励まし合ったりする場面等も年度当初より多く見られるようになった。 ・グループ学習ではリーダー制を多く取り入れ、どの生徒もリーダーとして役割を果たすようにした。更に、係活動以外にも役割を設定することで、「できた」という自信を持たせることができた。	3.3	B	【課題】 ・生徒同士で互いを高め合い、自分の持つ力に気づかせるような関わりや指導・支援が必要である。 【改善点】 ・生徒が頑張ったこと等をクラスや学部全体の場で評価する場面を増やす。 ・各クラスで生徒の実態の情報共有と指導・支援方法等の共通理解をこまめに行う。他クラスの教師がサブで入る場合、より丁寧に情報共有等を行う。
高等部	実態に合わせたグループ編成を行い、主体的な学びを促す指導・支援を行う。	1	学年やコースにとらわれず、生徒の実態や教科の特性に応じて柔軟に学習グループを編成する。	作業学習では、実態に合わせたグループ設定を行うことで、班ごとに作業基礎やパソコン、技能検定等実態に合わせた指導を行うことができた。体育や美術では新たなグループ分けを行うことで、実態に合わせた授業を実施することができた。	3.3	B	【課題】 ・より生徒の実態に合わせた柔軟なグループ分けを行うようにする。 【改善点】 ・教科によって、コースや学年に捉われない柔軟なグループができるように、時間割の調整等を行う。
			各教科において、生徒の実態に応じた主体的な学びを促す学習方法について検討し、共通理解をもって実践する。	今年度は、I 類型・生活コース・社会コースの各学年に分かれてテーマ研究に取り組んだ。生徒の実態把握を丁寧に行うことで、研究対象の授業を中心に、それぞれに必要な合理的配慮や授業の工夫を取り入れた授業改善及び実践を行うことができた。	3.3	B	【課題】 ・他学年や他コースの授業の様子を知る機会が少ない。 【改善点】 ・他学年や他コースの授業を見学する機会等を設け、学部内の生徒の様子を知ることでより主体的な学びを促す学習方法を検討していく。
	仲間との共同学習を通して自己肯定感を高め、自分らしく生きる力を育てる。		一人ひとりの持っている力や良さを更に伸ばせるよう、授業や支援の工夫を行う。	主に学年毎の授業において、個に応じた目標の達成に向けて、一人一人が活躍できる場面を設定する等の工夫を行った。また、適切な支援の下での仲間との共同学習では、仲間を認めたり自信を高めたりすることにつながることができた。	3.2	B	【課題】 ・生徒の情報を共有できる時間が少ない。 【改善点】 ・より一人一人の力を発揮できる授業を展開できるよう、教員間でコミュニケーションを密に取れる時間を設ける。

担当	重点課題についての目標	重点課題	目標実現のための取組	総括(年度末評価)		課題と改善点(来年度に向けて)	
				評価平均	判定		
		4	作業学習等で仲間と相談や協力、役割分担をしながら学習や製品制作に取り組んだり、販売学習で達成感を味わったりすることで自己肯定感を高められるようにする。	Ⅲ類型作業学習において、他の作業班と協力して一つの製品を作り上げる活動や、設定した目標達成に向けて一人ひとりが責任をもって製品を制作する活動を取り入れた。また、Ⅰ類型では、意見を交わしたり認め合ったりしながら創作ダンスを作り上げる活動を設定した。以上の取り組みにより、達成感を味わったりや自己肯定感を高めたりすることにつながられた。	3.4	B	【課題】 ・コロナ禍でも、達成感を味わえるような授業の工夫を行う。 【改善点】 ・コロナ禍でも、生徒の自己肯定感を高める機会が妨げられることの無いよう、様々な手段や方法を検討し、工夫して授業を行う。
総務部	各分掌と連携し、感染リスクの低減を図りつつ、学校運営の企画・調整を行い、重点課題達成の下支えをする。	1・2・4・5	各分掌と連携した感染症対応ガイドラインの作成や情報発信、新型コロナウイルスの感染状況や感染防止対策に留意した行事計画の調整・立案を行う。	コロナ禍において感染リスクの低減や円滑な学校運営を下支えするために年間行事計画の再設定、「新型コロナウイルス感染症ガイドライン」の策定や3回の改訂について取りまとめ等を行った。文部科学省による「衛生管理マニュアル」や国や県の通達、政府感染症分科会等の知見を参考にエビデンスに基づいた作成ができた。また、学校行事もガイドラインに沿って企画・調整を行った。	3.5	A	【課題】 ・引き続き先行き不透明な状況が続くことが予想されるため、引き続き各分掌の動きなどを調整したりするとともに、どこの分掌にも属さない隙間の仕事を率先して行う必要がある。 【改善点】 ・ガイドラインが改訂を重ねるたびに内容が増えていく。コンパクトにしていくことを心がけて調整していきたい。
	ホームページの内容のリニューアルと充実を図る。	2・3	本校教育への理解啓発を図るとともに、本校へ就学・進学する児童生徒や保護者が参考になるようなホームページにリニューアルする。	ホームページをリニューアルし、閲覧者が学校の様子が分かるよう内容の改善をしたり、学校だより等の通信も公開した。スマートフォンの利用が一般的になったのでスマートフォン向けのホームページにも対応させた。また、行事の様子や学校生活の様子をブログで発信することができた。	3.6	A	【課題】 ・ウイズコロナを踏まえた学校見学DAYの再構築と開催。 【改善点】 ・ウイズコロナを踏まえ感染症対策をしながら学校見学DAYと高等部見学会を共催する。
	防災教育を推進するための目標や資料の提供を行う。	6	本校の防災教育で活用できるように防災教育目標の立案や資料等の作成を行う。	学習指導要領や兵庫県の指針、最新の防災教育の知見を踏まえて「和田山特別支援学校の防災教育」を作成した。また、これまでの取組をぼうさい甲子園に応募したところ特別賞「URレジリエンス賞」を受賞することができた。	3.5	A	【課題】 ・これまで積み上げてきた地域や保護者と連携した防災学習と発達段階に応じた授業における防災教育の推進。 【改善点】 ・ウイズコロナを踏まえた防災学習の実施と授業での防災教育の取組の推進。
教務部	主体的、対話的で深い学びに重点を置いた授業改善の推進。	1・6	・新学習指導要領を活用や主体的、対話的で深い学びを意識した授業づくりのきっかけとなる校内研修を実施する。	・夏季休業中に校内研修を実施し、授業を担当している教科の学習指導要領の内容や目標を確認し、今年度実際に取り組んだ授業内容が対象児童生徒の実態に合ったものになっているか確認する機会を設けた。また、学部(学年)毎に実施した授業動画を基に主体的、対話的で深い学びの観点で分析・協議を行った。重度・重複障害のある児童生徒のケースについても、別途説明動画を作成し、共有した。	3.2	B	【課題】 ・今年度は支援研修部のテーマ研究が「主体的、対話的で深い学び」に焦点をあてたものであったが、計画段階から連携し、内容のすみ分けができて良かった。 ・次年度も新学習指導要領を中心に、実際の授業と直接つながるような研修を実施していく必要がある。 【改善点】 ・研修の計画時に他の部署と連携しながら取り組めるか、検討する。 ・新学習指導要領等、タイムリーで現場のニーズが高い内容やテーマの研修を実施する。 ・無理のない範囲で複数の研修を企画し、それぞれの教師が自分のニーズに合った研修に参加できる自主研修等の実施も検討する。
	個々の実態や特性等に応じた指導の充実を図る。	1・2	・個別の指導計画の記入方法について、目標や手立てを変更した経過が分かるよう、書き方を統一する。 ・目標や手立てを見直す期間を設ける。 ・目標の変更や学習状況を学部(クラス)間、保護者と情報共有する機会を設ける。	・コロナウイルス感染拡大による臨時休業の長期化で前期期間が大幅に縮小されたことから、Ⅲ類型、Ⅳ類型の児童生徒については個別の指導計画(通知表)を通年の評価とした。(※肢体Ⅰ類型は前期後期で評価)。 ・実態や目標の見直し(目標が予想より早く達成された等)が必要になることが予想されたため、目標や手立ての変更した場合の経過が分かるよう、記入方法を統一した。 ・10月中旬～下旬に目標の見直し期間(学校全体)を設け、11月の懇談で学習状況や目標や手立ての変更点等を伝える機会を設けた。	3.3	B	【課題】 ・懇談会等で、個別の指導計画を保護者に提示し、計画を相談しながら作成したり、各教科等の評価を丁寧に確認したりすること学校全体で統一されておらず、保護者と連携しながら個別の指導計画を作成する仕組みになっていない。今年度においては後期の懇談期間の後、個別の指導計画評価検討会(教師間での読み合わせ)になっており、懇談会で保護者に今年度の評価を伝える日程になっていなかった。(※コロナウイルス感染拡大により参観日が早まったこと等の影響もあり) ・現在の個別の指導計画は教科毎に1枚の様式になっており、各教科毎には確認しやすいが、懇談会等で保護者に確認してもらう際は枚数が多くなり、伝えにくい。 【改善点】 ・懇談会で個別の指導計画の計画や評価を保護者と共有し、連携しながら作成できるよう、懇談会の前に計画検討会や評価検討会等を設ける。 ・計画に載せる情報を精選したり、各教科等の計画や評価がA4サイズ2枚程度で収まるような様式を作成したりと、懇談会等で情報の共有がしやすい個別の指導計画の様式を検討する。また、通知表との一体化についても併せて検討する。

担当	重点課題についての目標	重点課題	目標実現のための取組	総括(年度末評価)		課題と改善点(来年度に向けて)	
				評価平均	判定		
生活安全部	児童生徒の主体的な活動を通じた、自治的集団作りの育成。	1	全校集会、委員会活動、児童生徒会選挙など、児童生徒が主体的に取り組めるよう、実態に応じて活動内容等を工夫する。	・集合しての全校集会や選挙が行えなかったが、執行部が中心となって録画し、各教室で視聴する形で実施することができた。委員会に関しては、生徒の実態に応じるだけでなく、コロナに対するガイドラインに沿っても各委員会で対応し、実施した。	3.4	B	【課題】 ・集団活動が規制され、自治的集団作りという点では厳しい年であった。 【改善点】 ・状況をみながら、以前の集合形態に戻すことを考えつつ、リモート等集合しない形態での新しい自治的集団作りを考える。
	いじめの未然防止、いじめの早期発見及び迅速かつ適切な対応	5	アンケートを実施し、アンケート結果を教職員間で情報共有する。 いじめ防止推進委員会を中心に、学舎とも連携を取りながら対応していく。	・年3回のアンケート実施により、いじめに関する情報を収集し職員会議を通じて職員間での情報共有を行った。その中で、担任を含め、学年、学部とも連携をとりながら、また他校生徒とのLINEでの案件もあり、他校との連携もとりながら指導に活かすことができた。	3.4	B	【課題】 ・情報化社会の中でSNSに関連したトラブルが本校でも見受けられるようになってきた。それらの問題への対応。 【改善点】 ・ネットトラブルの予防と対応について、教職員の指導力のさらなる向上を目指した研修等を計画する。
	感染症対策	3	家庭と連携を取り合いながら、日々の健康観察を行う。また、各部、学校医等と連携を取り合いながら、安心安全に学校生活が行えるような感染症対策に取り組む。(新型コロナウイルス感染症対応ガイドライン作成含む)	・1日3回検温し、健康観察表に記入、全クラスへの養護教諭によるチェックを行い、より細やかな健康観察を実施した。また、感染症対策については、各部、各学部と連携してガイドラインを作成するとともに、学校医や健康福祉事務所とも連携を取り合いながら進めることができた。	3.5	A	【課題】 ・新型コロナウイルス感染症に対しては、最新の情報収集を行い、社会情勢に即して速やかに対応する。 【改善点】 ・様々な感染症などにも対応できるよう、外部の諸機関とより綿密に連携を取り合って、対応していく。
進路指導部	高等部卒業後の相談・支援体制を整備する。	3	福祉・労働部門の関係機関と、保護者・本人、学校が連携し、進路相談会と移行支援会議を実施して、各機関の役割分担を決定する。	福祉・労働部門の関係機関を招聘して、高等部3年生の進路相談会(7月)および移行支援会議(1月)を実施し、卒業後の移行支援のニーズと支援内容を検討し、役割分担を確認することができた。また、福祉施設をはじめ、進路先にもできる限り参加していただくよう依頼した。 他学部・学年の児童生徒については必要に応じて個別に関係機関と連携を進めることができた。	3.4	B	【課題】 ・コロナ禍の中で、移行支援会議を招聘できず、連携に苦慮した。 ・進路先の都合上、急遽新たな支援機関(兵庫ジョブコーチ支援事業)との連携が必要になった。 【改善点】 ・会議を招聘せずに連携を深める方法を推進すること。 ・新たな支援機関との連携を深めること。
	キャリア発達を促すため、地域の企業等外部の事業所や人材との連携を深める。	4	外部人材と連携し、社会参加をめざした実践的・段階的作業学習の改善を図る。今年度は、ビルクリーニングの技能検定にとどまらず、清掃業者に直接清掃ノウハウを教えていただく。	作業学習でビルクリーニングを実施している班において、外部の業者を招聘し、技能検定にとどまらず、清掃業者のプロのノウハウの一部を直接指導していただいた。生徒はプロの技と道具に触れることにより、興味・関心を持って授業に臨み、仕事に携わる態度や技能を学ぶことができた。	3.4	B	【課題】 ・コロナ禍のため、事業の実施時期が遅くなったため、技能検定の実施時期に間に合わなかった。また、そこで得た課題等を今年度中に授業に還元する機会が少なかった。 ・連携企業の選定に課題があり、依頼しやすいビルクリーニング部門での企業連携をするようになった。 【改善点】 ・新たな企業との連携を模索し、技能検定の様々な部門での連携を広げること。 ・外部人材の活用から得られた改善点を、授業に生かすための工夫をすること。
支援研修部	学部や養護教諭、外部の専門機関との連携を強化し、個々の実態や特性に応じた指導を充実させて一貫した支援を行う(校内支援)	3	「個別の教育支援計画」や日常の支援について、学部や養護教諭と情報を共有したり担当者へ指導技法の習得・指導技術の向上のための助言をしたりしながら協働して児童生徒の支援にあたる。	個別の教育支援計画については、目標設定において全校生分を支援研修部専任が目を通し一部助言を行った。児童生徒の心身の健康面についてほぼ毎日養護教諭と情報共有し、てんかん発作や心の状態等を把握した。各学部と協働で事例検討会や支援会議等を開催し児童生徒の支援にあたった。	3.3	B	【課題】 ・個別支援が必要な事例について、各学部と支援部専任の連携が十分に取れなかった。 【改善点】 ・支援における課題やその対応について、学部長と支援部長が窓口となって情報を共有する。学部から寄せられる情報を支援研修部専任が情報共有できる場を週に1度設けて協議を行う。
			社会への移行、次年度への引継ぎを有効かつ正確に行うためにサポートファイルの見直しを行い、福祉等の関係機関と連携を強化する。	全校生に向けて居住地のサポートファイル(SF)取得を勧めた。教員に対しては、朝来市ふくし相談支援課を講師として招き、SFについての研修を持ったり移行における個別の相談に応じたりした。保護者に対しては、通信を用いてSFの意義や取得から移行の手続きを示したり、個別の相談に応じたりした。結果、ほぼ全員のSF取得につながった。福祉との連携については、7月に各学部長・学年主任と朝来市・養父市に関わる相談支援事業所、放課後等デイサービス事業所との意見交換会を持ち、保護者の同意のもと直接的な連携を行うシステムを構築した。	3.3	B	【課題】 ・市町サポートファイルへ移行し、活用するうえでの問題点や課題を検証し有効活用について検討する必要がある。 【改善点】 ・6月下旬を目安に問題点や課題を点検する。 ・サポートファイルの活用等の情報を通信等で職員に発信し、意識向上につなげる。本校が作成する個別の教育支援計画と福祉機関が作成する個別の支援計画について、指導目標の方向性が一致するように、サポートファイルに関わる連携の在り方等を福祉機関と共に検討していく。

担当	重点課題についての目標	重点課題	目標実現のための取組	総括(年度末評価)	評価	判定	課題と改善点(来年度に向けて)
					平均		
支援研修部	地域支援の活動を充実させる(地域支援)	6	コーディネーターを中心に校内の専門性を有する人材を活用した巡回相談と来校教育相談、わたく地域支援センターだよりの発行をすすめ、学校全体でセンター的機能を担う。	コロナの影響で地域支援に制限がかかったが、不登校児童生徒に対する支援に絞って複数体制での支援を行った。対象の小中学校を中心に福祉機関と連携するようなコンサルテーションが展開できた。市教委と連携し、個別の指導計画の立案や見直しについて情報発信を行った。小中学校からの問い合わせもあり、好評であった。学校訪問に同行するなど協働ができています。	3.3	B	【課題】・次年度もコロナの影響による制限が予測されることから、オンラインによる教育相談のシステムを構築していく必要がある。 【改善点】・オンラインによる教育相談の手順をまとめ、地域の校園に周知する。 【課題】・特別支援学校として高い専門性を校内に担保していくこと、そのために必要な人材育成のための手段を確立することが課題である。 【改善点】・コーディネーターと同行で地域支援にあたることや、地域支援センターだよりの原稿を執筆する取り組みを通してOJTの手法で人材育成に努める。学校全体でセンター的機能を担えるように、啓発活動を行うと同時に計画的な職員研修の場を設ける。
	新学習指導要領にのったテーマ研究の推進及び、福祉情報などの発信により、職員の専門性の向上を目指す(研修)	1	指導案の様式を変更し記入モデルを示すとともに、ピクトグラムを基にした授業改善を推進する。	コロナ感染予防のため、各学部における動画視聴による研修でテーマ研究はスタートした。大阪府教育センターや新潟県立教育センターの資料を紹介したり、NITSの次世代型教育推進センターが作成したピクトグラムを取り入れた指導案や実践シートを提案し研究が深まるよう工夫した。授業研究についても、録画ビデオによる参観とし、3観点によるチェックリストを用いた授業評価や支援研修部が提案した話し合いの柱による授業検討などの新たな取組ができた。	3.1	B	【課題】 ・次年度の研究テーマを慎重に検討する必要がある。 【改善点】 ・本年度のテーマを発展させるのか違った内容を研究するのかについて、アンケートを実施しニーズの確認を行う。決定した研究テーマに関連する分掌と支援研修部が協働しながら研究を推し進めるような体制づくりも検討する。
		6	支援研修部だよりを通し、専門性を高めるための情報を発信する。	教育・福祉の連携「トライアングルプロジェクト」の方策の一つである「学校の教職員等への障害のある子供にかかる福祉制度の周知」の一端として、福祉に関する質問事項を校内で取りまとめ、支援研修部だよりにおいて発信した。「ちょっと知りたい福祉のこと」というコーナーを設けて福祉の情報を発信した。	3.3	B	【課題】 ・教育キーワードを中心に情報発信を定期的に行う必要がある。 【改善点】 ・異動が多い現状を踏まえ、同じ内容を繰り返し発信するなどの工夫が必要である。 ・知りたいことや専門性を高めたい内容についてアンケート等を活用してリサーチを行う。
舎務部	卒業後の生活を見通した社会性、身辺自立、生活力の向上	5	コミュニケーション力等の社会性や身辺自立力、生活力の向上を目指し、学部・保護者との連携を密にし、障害特性・心理・背景、課題などの実態に応じた支援方法の検討と、情報の共有を図る。	舎生それぞれ課題があったが、粘り強い指導、支援により課題を克服したり成長させることができた。 支援グループの顔写真を掲載したプリントを配布しつつ、情報の共有をお願いしたこともあり、連絡事項記入用紙に学部での様子を丁寧に書いていただけた。また学部・舎双方から気になった事を積極的に情報交換できたため、早期解決につなげることができた。	3.3	B	【課題】 ・早期情報収集と発信、情報の共有 ・担当者会、グループ会の充実 ・寄宿舎、学部それぞれの生活や心理に違いがあることの相互理解と、さらなる学部との連携強化 【改善点】 ・現在の舎生との関わり方や舎全体としての支援体制を継続しつつ、会議や引き継ぎ等でより活発な意見交換ができる雰囲気づくりをする。また小グループによる話し合いの場も活用する。 ・担任の空き時間を把握するなどして、きめ細かな情報交換に努める。 ・連絡事項記入用紙の記載内容を引継ぎで活用していることを担任に伝える。
	寄宿舎指導員としての実践力と専門性の向上	6	様々な場面での課題や人権を大切にしたい支援方法の検討、および実践例等の研修を行い、専門性と指導力の向上を図る。	生活目標と指導計画、危険と防止、食事配慮事項等、舎生一人一人の情報を全体で読み合わせ確認したり、定期開催の支援グループ会を臨時に行ったり、全体報告したりして全職員の共通理解を図った。また支援担当や男女にかかわらず寄宿舎全体で対応した。人権研修などを通して舎生一人ひとりを大切にする気風の向上に努めた。	3.3	B	【課題】 ・研修のさらなる充実 ・舎生個々の状況や課題等に加え、指導員としての考えを引継ぎの場等で積極的に発信、議論できる場づくり・意識の向上 【改善点】 ・タイムリーなテーマ設定と小グループでの会議を活用し、発言の機会を保障しつつ、報告会で様々な考え方や方法を交流し学ぶ。 ・全指導員が分担して通信づくりに関わり、出来事の紹介にとどまらない記事づくりに取り組みながら、舎生への思いや支援指導について考えを深める。

担当	重点課題についての目標	重点課題	目標実現のための取組	総括(年度末評価)		課題と改善点(来年度に向けて)	
				評価平均	判定		
事務部	事務室職員が教員との連携を図り、学校運営に参画することにより、組織的な学校運営が促進され、学校の総合力を向上させることが期待できる。	1	①就学奨励費など児童生徒に関する事務処理において知り得た情報で、教員と共有すべき内容のものを迅速に提供する。 ②給与(手当)・休暇制度の改定、また福利厚生事業の実施など、その都度、職員へタイムリーに連絡していく。	左欄に記載した取組目標については、概ね達成できている。児童生徒に関する情報で教育活動に関するものは、共有し、また、給与改定、休暇制度改定、福利厚生事業の実施など職員に関わる情報については、県教委等から通達後、タイムリーに提供できた。 文科省の提唱する「チーム学校」の理念にもあるように事務室が学校運営に積極的に参画することで、組織的な学校運営が促進され、学校の総合力が向上する。事務室の学校運営への参画は、近年、芽生えた重要課題であり、更にこの取組を進めていきたい。	3.4	B	【課題】事務室の学校運営への参画は近年提唱された新しい課題であり、事務職員自身の意識改革が必要である。 【改善点】法的見地からの対応等事務職員の専門性を活かした提案や情報提供にさらに努めていく必要がある。
事務部	児童生徒、教職員が安心安全に学校生活を過ごせるための環境整備に努める。	a	施設・設備の老朽化への対応、防災、感染症への対応、不審者侵入への対応などの環境整備(必要物品の購入を含む。)に努める。	建物、設備、備品等が経年使用の中で劣化し、修理、買替えの時期が到来しているものがあり、また、児童生徒の障害種に対応した環境整備として次の対応を行った。 今後も、施設設備、教育環境、社会環境、予算の状況等に十分留意し、適切に更新整備を進めていきたいと考えている。 (1)R2.1～3月実績 寄宿舎2階トイレカーテン設置及び渡り廊下カーペット施工工事、北校舎外壁修理工事、寄宿舎浴室暖房設置工事、舎室Wifi設備設置、グラウンドベンチ設置 (2)R2.4～1月実績 コロナウイルス感染症予防消耗品購入、電動診察台購入、屋上送風機取替工事、気中開閉器更新工事、電気室ブレーカー取替工事、自立活動棟給水管漏水修繕工事、スポットクーラー購入、厨房食器消毒保管庫購入、体育館換気扇設置工事、体育館照明LED化工事、加湿器購入、空気清浄機購入、大型ヒーター購入、蒸気ボイラー基板修理工事、蒸気ボイラー配管漏れ修繕工事、蒸気ボイラー暖房用真空給水ポンプ修理工事、教室エアコン修理工事 (3)今後予定 寄宿舎乾燥機修理、入出力支援装置購入、職員玄関フィルムシート張り工事、寄宿舎棟・北校舎・体育館トイレ自動水栓人感センサー化工事	3.3	B	【課題】施設の整備には多額の経費を必要とする場合が多く、昨今の県財政の厳しい状況の中、限られた予算で適切に整備を進めることが非常に困難な状況となっている。また、今年度は新型コロナウイルスへの対応や、その影響による部品納入の遅れ、品不足が発生し、工期や納期の遅延等が見られた。 【改善点】安全安心な学校環境の実現に向けて、全職員がその意識を持ち、施設設備の状況について留意し、危険箇所の改善提案等を行うことが重要である。また事務室担当者は予算確保について県財政当局への要望を的確に行っていく必要がある。

【学校関係者評価】

○各部・学部によって具体的に考えている「地域」の範囲は小学部から高等部まで学習段階により年齢層に幅があり、地域との連携や関わり方が一様ではないので、学習段階に応じて様々な関係者と連携を取り広げることが大切だと思います。地域や企業が関われることは、まだまだ多くあり、具体的に何が必要で、どのようにして欲しいかを情報提供してもらえれば、より効果的な協力体制が可能になります。

○インターネットやSNSの指導は難しいので、指導する教員に力をつける為に、校内研修、外部講師等を招き最新の技術・知識を教員が身につけることが望まれます。

○ICTの充実として、ホームページを見やすく工夫、ブログのページの頻繁な更新、YouTubeを活用した「わとくチャンネル」「わとくスタディ」の教材化は評価できます。今後、ICTを使った情報伝達の効果的な方法、GIGAスクール構想、オンライン授業など、臨時休校になった時への備えのために、さらなる充実を期待します。

○不登校生徒への対応と対策を生徒の実情に応じ、継続した取組になるようにして下さい。

○コロナ禍のなかで通常とは異なり大変困難な状況のなか、丁寧な進路指導をしていただいたことで充実した結果に結びついています。

○学校から家に帰った舎生にとって、舎はリラックスできる家庭のような場となる様に配慮もよろしくをお願いします。

○主体的・対話的で深い学びと言っても教員間では主体的がどんな姿なのか、とらえ方は多種・多様になります。主体的な姿とはどんな児童生徒の姿なのかを取り上げて研修へ落とし込むことも大切になります。そういった意味でも教員の共通理解は大切です。また、最長で12年間も在籍することもあり、特別支援学校として長期的な12年間の成長を見通し、学部間の連携を図ったカリキュラム・マネジメントが必要となります。